

井上光晴 新作品集

2

勁草書房

井上光晴新作品集 2

昭和45年2月28日 第1刷発行 定価 800 円

著 者 井 上 光 晴

発行者 井 村 寿 二
東京都千代田区神田駿河台2ノ3

印刷者 川 口 央
東京都港区三田 5-7-3

発行所 東京都千代田区 勁 草 書 房
神田駿河台2ノ3
(株式会社大和出版部)

落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

図書印刷・和田製本

© Printed in Japan 0393-8818-1836

目次

乾草の車

3

黄色い顔の看守

85

紙の夜に

106

家紋のある壁

139

九月の土曜日

173

缺のような海

207

海へ行く駅

215

安らいの場所

231

鳩舎の小さい梯子

265

清潔な河口の朝

296

解題

321

井上光晴論

日野啓三

322

井上光晴
新作品集

2

乾草の車

1

予備校生の笑いには残忍なびびきがかもっている。小粥寮一はいつもそう考えていたが、それをいうとすぐ事務局の連中に賛成されそうなので、口にだせなかった。実際、事務局の連中は、何事も彼に反対した例しがないのだ。その代り、どんな些細な事務でも彼に裁決を求めてくる。いつかは赤色のボールペンを一度に二ダース買うか、或は三ダースにするかまで彼にききにきたことがあった。予想屋みたいな口のきき方をするので、「競輪」という渾名をつけられている英語教師が休講した時、穴埋めに出て、彼は殆ど恐怖に近い気分に陥ったことがある。彼はその教室で、戦時中の受験雑誌に掲載された学生小説を読んだのだ。「大東亜戦争」の末期、川崎の機械製作所で働いている主人公の夜間中学生は、血の滲むような生活をして、第一高等学校の難関を突破するが、入学できない。なぜなら、少年の勤務する機械製作所には、会社全体に徴用令が

かかっていたからである。少年はもうがくような思いで会社の人事課にたのみこみ、またなんとか手段を講じてもらうために母校の恩師に訴える。何処にも働かず、昼間の学校に通って受験勉強に専心してきた現役や予備校生は、何ものにも束縛されず入学でき、国家の要請に従って機械製作所で働いてきた自分が、なぜ合格しても入学できないのか。工場の仲間も学校の教師も、人事課でさえ、少年をなんとか一高に入学させようとして奔走するが、徴用令の壁は厚く、どうにもならない。「父さん、どうしたらいいんだ」と仏壇の前で身をもむ少年の背中をなでながら、工場の賄婦をしている母親はただおろおろするばかりだ。次の日、少年は血走った眼で旋盤を操作している。鋼のかわりに自分の腕でも突込みたいような絶望した気持で。昼の休憩時間、総務課から緊急の呼びだしがかかり、少年はもしやという期待を抱いてかけつける。しかし少年の前にだされたのは徴用解除の通知ではなく、兄の戦死を知らせる公報であった。その瞬間、少年の胸を兄の鋭い声が貫く。現在、天皇陛下と国家にとって何が大事か、久雄、考えてみよ。よく考えてみよ。その夜、少年は一晩中、真暗な街を歩きまわる。一高に行くのは、決して自己のためではない。天皇陛下につくすすぐれた技師になるにはそれが必要なのだ。兄さんわかってくれと、少年は胸の中で叫ぶが、兄は答えない。少年は何時の間にか自分の勤務する工場の裏手にきている。長い塀。そうじゃないか、兄さん、僕は

この日を目指して、昼間働いてきたんだ。受験生の誰もが参考書にかじりついてゐる時に、僕は戦車の部品を製作していた。その僕だけが合格してもなぜ一高に入学できないのか。しかし、兄の声は返ってこない。翌朝、一睡もしない彼は第一高等学校を訪ねて入学を取消し、いぶかる事務員に対してこたえる。微用令がかかっているからではありません。僕は自分で機械製作所に残ることを決意したのです。そして小粥寮一が学生小説を読み終った時、百五十人収容の教室のあちこちに、あのなんともいへぬ残忍な笑いが起きたのだ。死にかかっている動物の滑稽なしくさでもみつめているような笑い声を、予備校生たちは彼にむけた。

彼は先程から、そこに坐っていることをようやく苦痛に思いはじめていた。幼稚園の運動会とはいえぬような大がかりなグラウンドの模様とか、楽隊に反撥を感じたし、何よりもテントの中の甘酸っぱい保護者たちの会話にやりきれなかったのである。私立大学から借り受けたグラウンドでは、いま園児たちが、フラッグ・マーチという合同遊戯をしており、揃いの赤いスカートをはいいた若い保母は、三人とも面をつけたような微笑を浮かべていた。

「あら、たちちゃんどうしたのかしら」

彼は義妹の声にうながされるようにして、娘の方を見た。どうしたのか、他の園児たちが両手に持った二本の旗を頭上で交差しながらゆっくりと体を回転させているのに、達子は黙って突っ立ったままだ。

「まあいやねえ。忘れたのよ、きつと」友子はいった。

ひとりの保母が駆け寄り、手をつないで皆の遊戯に合わせようとしたが、達子は動こうとせず、ペソをかいいていた。テントの前列で笑い声が起き、彼はいたたまれぬような気持で立ち上がった。

「何処に行くの」

「ちょっと」彼はこたえて、テントをでた。

グラウンド脇の道端には、ジュースとかアイスクリームを売る自転車が並んでおり、フランス縞の小さいテントを張った特設の店さえもできている。彼は金網塀に沿って歩き、なるべくフラッグ・マーチの方を見ないようにした。また笑声。彼は足を早めて大学運動部の手洗所にむかった。すると、ちょうど手洗所からでてきた増谷医師にばったり出会ったのだ。

「あ」

「どうも」増谷医師はいった。それから顎を引くようにして、「今度は残念でしたね。でもお宅はまだ若いから、すぐまたおできになりますよ」とつけ加えた。

「その節はお世話になりました」彼は改めて挨拶した。

「いや、いや」増谷医師は体をグラウンドにむけて、そういった。

「それじゃ、いずれ」彼は頭をさげたが、なぜか手洗所の中に入るのがためらわれて、そのまま通り過ぎた。でもお宅はまだ若いから。彼より確か五つか六つ年下のはずなの

に、そういう言葉をけろっとして増谷医師は使う。流産だと診断された時、妻のいったことがすうと頭をかすめる。ほんとに無責任なことというのよ。こんなことなら最初から黄体ホルモンを打っておけばよかったですね。それがわかってるのなら、はじめから黄体ホルモンを注射すればいいじゃないですか。今度入ったと思ったら知らせて下さいなんて、不潔だわ。

フラッグ・マーチの吹奏楽が終ったので、彼はテントに戻った。増谷医師がきている以上、このテントの何処かにいるに違いないが、見廻してもそれらしい姿は見えなかった。前にも増して甘酸っぱい話し声を取りかこみ、彼はそれから逃れるように、やはりあの窓際の予備校生を思い切り怒鳴りつけてやればよかったのだと思った。顔の長い、コール天の上衣を着た予備校生が皆の笑いを代表するように、「そいつはきちがいだな」と呟いたのである。

「きちがい、どうして」彼はきいた。

「だってそうじゃないですか。一高って言えば東大の教養学部でしょう。それをわざわざ自分から取消しに行くなんてきちがいですよ」

「しかし、それは工場に徴用令がかかっていたんだから……」

「徴用令なんか知らないけど、折角合格したのに自分の方から降りるなんてのはやりませんよ。それとも事務局長さんは、僕たちに浪人なんかしないで就職した方が身の

ためだというんですか」

「それは違う。僕がいいたいのはそういう戦争中の時代にも受験勉強していた学生の心情を君たちに知ってもらいたいと思って、それで……」

「そうなりやこの予備校だって、おまんまの食いあげになるよ。なあ」教室の後方に坐っている男の声が彼の言葉を横取りし、予備校生たちはふたたびゆがんだ笑い声をたてた。突然、楽隊が「黄色いリボン」を吹奏しはじめ、キャアキャアという園児たちの声につられるように、テントの端の方でざわめき起きた。

「仮装行列だわ」

「あつ、オバQだ。オバQがいる」

「保護者の方たちかしら。幼稚園の運動会に仮装行列なんて珍らしいわね」

「あれはね、このグラウンドを貸しているA大の応援部の賛助出演なんですよ」テントの最前列に腰掛けている男が、振りむいていった。

「ほんとにこの幼稚園はよくやるなあ。こんなアトラクションはよそじゃできないよ」

「あつ、新撰組だ。ママ、新撰組だよ、ねえ」

「さあ、新撰組かしら……」

彼の二列前方に坐っている若い母親が困った声をだし、側の男が「白装束を着てるから白虎隊じゃないかな」と、助けるようにいった。

「あれはほんとの刀、ねえ、ママ」

「そうね、ほんとの刀みたいにしてるわねえ」

「白虎隊じゃないよ、あれは。普通のザンギリ頭じゃないか」

「じゃ、何だい。彰義隊か。……でも白装束というのは変だな。あれは切腹する時やなんかの着物だよ」

「剣道部の学生が頼まれてでたんじゃないですか。サービスに……」

小粥寮一はテントの前にさしかかる白装束の学生たちを見た。オバQと貫一お宮に挟まれて、五人一隊の白装束が真剣に似た作りの刀を、左手に下げている。夫々が薄化粧をしており、先頭のひとりには、はつきりそれとわかるほどの口紅を唇に引いていた。

「どうしたの、兄さん」友子が彼の顔をのぞきこむようにしていった。

「なんでもないよ」彼は頭を振った。

「なんでもないって、真青だわ。どこか具合でもわるいのじゃない」友子はいった。

「いいんだ。心配いらない」

「そう、それならいいけど……」

彼は歯を食いしばるようにして、目の前に行く白装束の一隊を見た。着物にふさわしく、五人とも深刻な、緊張した表情をしており、それがまたおかしいといって、人々はくすくすと笑い合った。しんがりの学生は片足を少しひき

ずるようにして歩いている。彼はふっと、学生たちが何か朗詠するのではないかと思ったが、白装束の一隊は黙々として通り過ぎ、拍手とまじり合ったテントの中の笑い声は一段と高くなった。

まさか、あの男が自分に当てつけるために、あんな仮装をさせたのではなからう。そんな手のこんだことをするはずがない。彼は額に手を当てながらそう思ったが、掌の感触はぞつとするほど冷たかった。

唇の端に小さい瘡蓋のできた背の低い男は一週間前の日曜日に、彼の家を訪ねてきた。そして、玄関にでた彼が「どんなご用件でしょうか」ときくと、「以前、長崎県立浦炭鉱の機会におられた小粥寮一さんですね」といったのである。

「小粥ですが……」彼はためらうような声でいった。

「そうですか。あんたが……」男はまっすぐ彼の顔に視線をむけた。「機会の件でできたいことがあるのですが、時間をいただけますか」

「機会の件。……」彼は口の中でいった。「お上り下さい。どうぞ」

小粥寮一は男を応接室に案内し、流産で寝ている妻の部屋に顔をだして、「昔の友人の紹介状を持って見えたんだ。すぐすむよ」といった。彼が応接室に戻ると、紺色の背広を着た男は立ち上り、「申し遅れましたが、私はこういうものです」と、名刺を差出した。浅原幸雄。ききおぼえの

ない名前だが、この男は何者なのか。「どうぞお坐り下さい」小粥寮一はかすれた声でいった。

「結構なお住いですね」浅原幸雄と名乗る男は部屋の中を見廻すようにしていった。

「いいえ」小粥寮一は名刺の名前をもう一度頭の中で反復した。機会の件でできたいことがあると、この男はいうのだ。

「あれからすぐ、上京されたのですか」

あれからだというのか。小粥寮一はちらと相手の顔を見たが、男の表情は動かなかった。

「去年でしたか、肩書のついたあなたの随筆を拝見しました。はじめは同姓同名かもしれないと疑ったのですが、やはりあの機会におられた小粥寮一さんのことだとわかって、これはどういふことかと考えました。ああして公刊の雑誌にはつきり小粥寮一という本名をだされる以上、何か期する所でもあられるのか、そうも考えましてね。……」唇の端に小さい瘡蓋のできている男はそこで間をおいた。

「実をいうと、これまで二十年間、私はずっとあなたを探していたといつてもいいのですよ。なぜ私があなたを探しているか、それはおわかりでしょう」

「失礼ですが……」小粥寮一はいった。「ご用件をきかせていただきたいのですが」

「用件」浅原幸雄と名乗る男は語尾を上げた。「用件といわれるのですか」

この男の目的は金か。それとも……小粥寮一は左手の人差し指を自分の口許にあてた。すると彼の心をみすかしたように男はいった。

「あなたは何か考え違いをしているのではないですか。用件をいえというような問題じゃないでしょう。私はあなたを敗戦以来ずっと探していた。そういつているのですよ」

友子が茶を持って入ってきたので、男は言葉をやめた。

「あなたは機会と……」義妹が出て行くとすぐいいかけて、彼は口ごもった。

「私は機会の精神を継いで、敗戦直後、立浦炭鉱で起きた自決の真相を究明している者です」男は抑揚のない口調でつづけた。「あなたが逃亡された後、機会の同志二人は見事に自決した。それを世間は追いつめられた犯罪者の自殺行為というふうに片づけている。警察調書もそうなっています。いくら敗戦のどさくさにまぎれてとはいえ、これは許されないことです。これでは自決した機会烈士の霊も浮かぶことができない。……」

「ちょっと待って下さい」小粥寮一はいった。「いま、逃亡したといわれたが……」

「逃亡されたのではないのですか」浅原幸雄と名乗る男は、かぶせるようにいった。「機会の同志二人はあなたも含めて、自決することを誓約していた。そしてあなたは決行の直前になって、その誓約を守らず、行方をくらましただけです」

「だから、あれは……説明するとわかりますが、行方をくらましたというようなことではなくて、なんといったらいいか……」

「説明してもらいましょうか」男はいった。「誓約に背いて逃亡された理由を、はっきり納得のいくよう話して下さい」「逃亡とか行方をくらましたとか、そんなことじゃないんです。確かに自決する決議はしていました。しかし、あの平岡さんたちの起した事件で事情が一変して、あの決議は二く拘束力を失なってしまった。あんな事件を起した平岡さんたちと一緒に自決したりすれば、それこそ機会の思想が根本的に崩れてしまう。私はそう考えたんです」小粥寮一は言葉を立て直した。目の前の男がどこまで事情を知っているか知らないが、なんとしても自分を守り通さねばと思ひながら。

「どうもわからないな」浅原幸雄はいった。「あなたは何か、自分では機会の同志が遂行した事件と関係ないようなことをいわれるが、それはどういうわけですか」

小粥寮一は何もいわず、繁腕を取り上げて口をつけた。

「それからまた、機会の同志に対して、誹謗するようない方をされるが、なぜ事情が一変したのか、それをきかせてもらいましょう」

「私は、平岡さんたちが計画された事件に反対でした。黙って自決すればいいと考えていたからです。名目はどうあれ、隠匿物資を摘発してから自決するなどということを不

純に思いました。平岡さんは別に炭鉱の発動機船を襲撃して、それで麦や塩を運ぶという案も持っておられたが、そんなことをしたら、それこそ私利私欲のために事件を起す徒党と化してしまふ。私は平岡さんの襲撃案に反対してそのことを主張したんです。しかし平岡さんや中井さんはきき入れられなかった。……」小粥寮一はいった。

「あなたは機会の事件を、私利私欲のための徒党が起したのだといわれるのですね」男は低い声でいった。

「そうとられても仕方がないといってるんです。はじめは黙って神社の境内で自決する。そういう誓約でした。それを、廃坑に海軍の隠匿物資が保管されているという情報をつかむと、それを奪取した後、機会をみて自決するというふうに改められたのです。……」

「それで」浅原幸雄はいった。「それでどうしたというんですか」

「ですから、私は平岡さんたちがやろうとした事に反対したんです。いくら隠匿物資の摘発だといっても、今の時期にそれが何の役に立つというのか。機会をみて自決するという考え方は納得できない。私の考えはそうでした。しかし、平岡さんはきかれずに襲撃を遂行された。……」小粥寮一はいった。

「つまり、機会の同志は自分の反対を押し切って、隠匿物資を摘発した。それで、あなたは、自決の誓約を反古にし、逃亡する権利があると考えられた。そういうのです

ね」

「そうじゃない。そうじゃないでしょう。私がいうのは、平岡さんたちがあんな事件を起こした後では、自決そのものが不純になる。事件後では何をしても無駄だと考えたんです」

「なぜ無駄になります。その証拠に、機会の同志は事件の後、立派に自決し果てていてはありませんか」浅原幸雄はいった。

「しかし、あれは……」

「あなたはまさか、世間と同じように、あれは自決じゃない。追いつめられた犯罪者が、自暴自棄でやった自殺行為だと考えておられるわけではないでしょうね。もっともあなたは、その時すでに立浦炭鉱におられなかったわけだから、真相をつかむのは困難だろうが」

「私はまだ炭鉱にいましたよ」小粥寮一は嘘をついた。機会の同志たちによって廃坑を改造した地下倉庫の襲撃が決行される日の前夜、彼はひそかに立浦炭鉱を出たのである。

「まだ炭鉱にいた。事実でしょうね」

「ええ」彼はこたえた。

「それじゃ機会の同志が自決するのを、あなたは知っていたわけですね」

「それは知りません。平岡さんと中井さんがああいう状況で死なれるとは思いませんでしたから」小粥寮一はいっ

た。

「ああいう状況」浅原幸雄はひとりごとのようにいうと、応接室の窓の方をみた。それからゆっくりと顔を戻して「はつきりしていただきましょうか。機会の同志がどんな死に方をしたのか。あなたが見られたという状況をきかせて下さい」といった。

「直接目撃したわけではありませんから、大体のことしかいえませんが、平岡さんと中井さんは海岸の廃坑の中で、ダイナマイトによる自決をされたということでした。警官や勤労課の者に包囲されて、どうにもならなかったんですよ」小粥寮一はいった。何年か後できいた事件の様子を綴り合わせるように。

「許せない」

「え？」彼はきき返した。

「そういう解釈は許せないといっておるのです。しかも逃亡者であるあなたの口から……」

その時、ノックの音がして、友子が顔をだした。「大村先生がお見えになっています」

浅原幸雄と名乗る男は反射的に立ち上った。「出直しましょう。どっちも簡単に片のつく問題じゃない」

白装束の一隊を挟んで仮装行列はグラウンドを半周した所でぐるりと廻れ右をし、楽隊のマーチもまた米軍の行進曲に変わった。

「オバQが戻ってくるよ」

「ママ、ねえ、さっきの刀、ほんもの？」

彼は友子に耳うちした。「先に帰るよ。用事を思いだし
たんだ」

「そう」友子は不満そうにいった。「もうお弁当の時間な
のに」

「電話ですむかもしれないから、戻れたら戻るよ」

「なるべく戻ってきてね。たっちゃん、淋しがるわ」

テントをでると、小粥寮一は仮装行列に追いつかれぬよ
うに、早足で歩いた。グラウンドの出口で危くアイスクリ
ーム売りの自転車とぶつかりそうになり、体を立て直す間
もなく、今度は鼻先をかすめて三輪車が走り抜けた。二人
連れの大学生が、口を大きく開けて尻餅をついた彼を笑い
い、後からきた女学生までが、口に手をあてていた。彼は
ズボンについた泥を払った。それからゆっくりした足どりで
大学生とすれ違ったが、その時、「危なかったですね」
という声が背後からかった。

彼が振りむくと、同年輩の男が、会釈をするような恰好
で近づいてきた。

「実際、この頃は安心して道も歩けませんね」

「どうも……」彼は曖昧にこたえた。

「運動会にいらしたんですか」

「ええ」擦り寄ってくる男に対して、だんだん警戒するよ
うな気分になりながら、彼はいった。

「幼稚園の運動会といっても近頃はさかんなものですね」

彼は返事をせず、息をつめるようにして男の顔を見た。
もしかすると、この男も僕会に関係のある者かもしれない
のだ。

「どうかなさいましたか」

「私に何か用事……用事でもあるのですか」小粥寮一はい
った。

「え」男はびっくりしたように彼を見直し、内ポケットに
手を入れて名刺を差し出した。

沢田電気オルガン商会。服部敏彦。

「それで、私に何か」彼はいった。

「道端で何ですが、少しお時間を拝借できますか」

「どうぞ」彼は身を引くようにしていった。やっぱり僕会
の男だ、と思いながら。

「そこにもありますように、私どもは電気オルガンを扱っ
ておる者ですが、今度新しい販売方式を採用致しまして
ね。これはもう画期的な方式で、従来のような分割支払い
とか、その種類のものとは、まったく違うシステムなの
です。なんといいますが、ある時払いの催促なしとでもい
いますか、一流メーカーの電気オルガンを即刻、今日から
も使用していただき、しかも一時金はもちろん、一年間は
掛金も不要なんですよ……」

この男はほんとうに電気オルガンの販売人なのか。彼は
視線を男の口許から下方に移した。細い縦縞を走らせたグ
レーの背広は相当くたびれている。

「誰も彼もこのシステムでおねがいするというわけではありません。信用できる方だけ。……そういう方だけに、この新しいシステムを利用していただくんです」

「今、はじめて会っただけに、あなたはなぜ私が信用できると思うのですか」彼はいった。

「そりゃ、もう……」電気オルガンの販売人は瘦せた頬を掻いた。「あんな一流の幼稚園に子供を通わせていらつしやる、保護者の方ですから……」

2

受付の男に案内された部屋はひどく汚れていて、療養所ではなく、ミシン工場の面接室でもあるかのように、きらきらするごみにおおわれていた。早坂正衛がミシン工場を連想したのは、半年程前、三好洋子というミシン会社の女子工員に拾った定期券を届けに行ったことがあるからだ。昼休みの時間、ほこりっぽいミシン工場の面接室にあらわれた彼女は、礼よりも先にむしろ雑談するような口調で、「どうしてあたしがここに勤めていたこと、わかったの」といった。

「どうしてって、定期券入りに君の社員証が入っていたからだよ」彼はいった。

彼女はそう美人というほどではなかったが、小柄でびちびちしており、次の日曜日、一緒に多摩墓地に行った時、自分の方から「あたし、会社で何と呼ばれているかわかる

でしょう。オリンパス・ペンよ」といいたのだった。

それから彼女は殆ど一方的に自分の家庭のことについてしゃべりまくり、(彼女の父は大阪の化学工場の技師長をしているが、もう何年も前から愛人と同棲しており、家のことをかまいつけないので、弟を学校に入れるために、彼女が勤めているのだという話だった) そのあと「あなたは学生でしょ」ときいた。

「学生とはいえないな。浪人の予備校生だから」彼はいった。

「そう」オリンパス・ペンはがっかりしたような声をだした。「うちは何してるの」

「何もしてないよ」と、彼はいった。昔は大臣を刺そうとしたこともあるが、今はわけのわからぬ仕事をしているといえ、どんな顔をするだろうか、と思いながら。

「何もせずに食えるなんていいわね」

見ろ、すぐ地金がでたじゃないか。技師長の娘が、食べるなんていいわね、などというものか。彼は胸の中で悪態をついたが、顔にはださなかった。しかし、つきあってみるとオリンパス・ペンはなかなか気だてがよく、化学工場の技師長は嘘だとしても、父親が他に女を作って、家族をかまいつけないというのは、事実らしかった。二度目に多摩墓地で会った時、三好洋子はしんみりとその話をしたが、彼の顔色を見ると、「こんな話、退屈だわね」といった。

やがて面接室の入口にカーディガンともジャンパーともつかぬ毛糸編みの上衣を着た男があらわれ、立ち止ってじつと彼の方を見た。「安田さんですね」といって早坂正衛は頭を下げた。しかし、男はこたえず、椅子をぎいと鳴らして彼の前に坐ると、ズボンのポケットから折り曲げた封筒をだしてテーブルの上においた。

「早坂といわれるのはあんたですか。こんな手紙をもらっても、私には何のことかさっぱりわかりませんよ。この手紙に書かれていることなんか……私は何も関係ないから、何をきかれるかしらんが、私としてはこたえようがない。もうみんな忘れてしまったし、この療養所だつて、あなたのおかあさんのことを知ってる者は誰もいないのだから……」

安田国芳はせかせかした口調で一氣にそういったが、しゃべっている間中、彼の顔を一度も見ようとしなかった。

「母のことを誰も知ってる者がいないから、安田さんにききにきたんです」彼はいった。

「手紙にも書きましたが、あなたにきけば教えてもらえる、そう思ったんです」

「私にきけばわかる。……どうしてそう思うのかね。私は何にも知りませんよ。変だな。私に教えてもらえるなんて……私なんか何も関係ないんですよ」

想像したよりもずっと老け込んでゐる目の前の男を見据えるようにして、早坂正衛はいった。

「この療養所で母が自殺したことは知っておられるでしょう」

「そりゃ……」安田国芳は息を呑むような声でいった。

「おかあさんが亡くなれたことは知っていますよ。しかし、それは知ってるというだけのことです。私には何も関係ないんだから」

「僕はただ、母がなぜ自殺したか、それを教えてもらえばいいんですよ。母がこの療養所で働いていた時、あなたは入院されていたんでしょ」

彼は男の顔から視線を外さなかった。安田国芳の黄色い顔の皮膚はかさかさ乾いていて、下瞼は老人のように垂れ下っている。

「そりゃ、私はずうっとここに厄介になっていきますよ。でろといったって、別に行く所があるわけじゃないしね。辛い、働きながら療養していいということで、ここにずっと居させてもらっています。でも、だからといって……確かにあなたのおかあさんがここにおられたことは知っていますが、それは知ってるだけということなんだから、くわしい事情は何もわからんのだよ」

「父のことはどうですか」

「え……」

「僕の父は早坂実というんですが、ご存じないですか」彼は男をみつめた。相手の表情の動きをとらえるような眼で。

「はやさか……」男は口の中でぶつぶつといった。「知らないな」

「戦時中からこの療養所に入っていたんです。安田さんは何度も会われているはずですよ」彼はいった。

「早坂ね。……」安田国芳は上目使いにちらりと彼を見て、考えるそぶりをみせた。「会っているかもしれないが、思いだせないな」

「そうですね。父はよく安田さんのことを知っていますけれどね」彼はカマをかけた。安田国芳のことなどきいたこともなかった。

「え、お父さんが話しておられる。お父さんが私のことを知って……何とおられるんですか」

「安田さんは戦前に、父と同じ事件で、一緒に裁判を受けられたんでしょう」彼は母の手帳にでてくることを口にした。

「そりゃ、あんた」安田国芳は弾かれたような声をだした。「そんなことはもうみんなすんでしまったことですよ。あんたのお父さんが何といわれているか知らないが、事件とか裁判とか、私にはもう何も残っていないのだから。……」

「それじゃ安田さんは、僕の父を知っておられるんですね」

「だから、知つてるといっても、そういうずっと以前のことでからね。……役に立たなくて何だったけど、そういう

事情だから……」

「待って下さい」彼は椅子をずらそうとする男を止めた。「あなたが説明されないのならそれでもかまいませんが、母の手帳にでてくる通りのことを、そのまま事実だと考えていいんですね」

安田国芳はいったん立ち上がりかけた腰をおろしたが、黒ずんだ唇からはなかなか言葉がでてこなかった。

「手帳とか事実とか、何のことか私にはわからないが……」男はやつといった。

「わかりませんか」彼はいった。「自殺する前の手帳に、母はちゃんと書いていますよ」

「だから何を書いてあるんです。おかあさんが死なれたことで責任があるようにいわれちゃ困るな」

「母がなぜ自殺したか。手帳に書かれていることが事実かどうか、僕はあなたからそれをききたいんですよ」彼は強い口調でいった。

「そんなことをどうして私にきく。手帳に何を書かれているか知らないが、私には何も……」

「何も関係ないといわれるんですか」彼はたたみかけた。

「知らんね。私は何も知らんよ」安田国芳は突然居直るようにいった。「あんたの母親が自殺したことで、そんなことといわれる筋合いは何処にもない」

「安田国芳に破滅させられたと、母は何度も書いていますよ」彼は素晴らしいながら、小刻みに顫える男の唇を見つめ